

校注『慈鎮和尚自歌合』稿 (I)

石川 一

本稿は『慈鎮和尚自歌合』前半の大比叡・小比叡・聖真子の三社を範囲とした。

〔凡例〕

- 1 底本は永青文庫本に拠り、できるだけ忠実に底本の原態が復元できるように努めた
- 2 本文に問題のある箇所については、(ママ)を付し、注で他伝本の本文で修訂した。
- 3 読者の便宜を計るために適宜漢字を宛て、その場合は、底本を振り仮名の形で表した。
- 4 難解な語句には読み仮名を付け、()で囲んだ。
- 5 歌番号は『校本拾玉集』に拠り、『新編国歌大観』番号を半角で併記した。

「日吉歌合 慈鎮和尚」(外題・題箋)

大比叡十五番

一番

左持

101 志賀の浦の浪間に影をやどす哉鷺の深山に有明の月

右

撰政

102 いにしへの鶴の林に散花のほひを寄する志賀の浦風

哥の道は秋津嶋のならひ、日の本の国のことわざと也にければ、この世に生まれぬる男女、わが国に跡を垂れ給神仏までも、此事をばもてあそび給なるべし。その中に古より此道を深く思へるともがら、をりくりに絶えざるべし。い

はゆる、あがりては柿本人丸、山辺赤人、其よりくだりては在原業平朝臣、花山僧正并素性法師、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等也。哥のよきあしきをも、かやうの人にや思ひ分くべかりけん。今の世には我も人もいかなるをよろしと言ふべきぞとも、知れる人はかたかるべし。

しかるに、いま二百首の哥を百番につがひて、七の御社の宝の御前におのく十五番にてたてまつり給事有。よりて、この歌の劣り勝り注したてまつるべき由おほせかくることは、かつは神事に事をよせ、かつは結縁のため也。是を強て辞び申さば本意なくもなりぬべく、かくれての恐れも有ぬべし。又知り顔に注し申せば、すでに未得為得未證為證の罪さがたくなりぬべけれど、神事といひ、結縁といひ、のがれがたきによりて、痴狗塊を逐ひ、犂牛の尾を愛するがごとくに、愚かなる心、短かき詞にまかせて注し申べきなるべし。

願くは和光同塵のあはれみにて照らしてみそなはし、許されむことをとなん、かしこみくも申といへる事然り。そもく一番のつがひ、左は鷺の峯の秋の月ひかりを宿し、右は鶴林の春の花にほひを寄せたり。両方の本地、春秋の花月、いづれを勝ると申がたし。仍同科とす。

▽大比叡：大宮権現。神体は大己貴神で、大和の三輪明神を勧請したものの。三輪と共に日本国の地主。本地は釈迦如来。

○拾玉集(未見)。各社一番左歌はこの歌合のための新作歌。参考

「いつとなく鷺の高嶺にすむ月の光をやどす志賀の唐崎」（千載・神祇一二七六 法橋性憲） ○志賀の浦：近江国の歌枕。琵琶湖西南岸の地。○鷺の深山：霊鷲山。釈迦が法華経などを説法した聖地。ここでは転じて比叡山をさす。○有明の月：真如の月。永久不変の真理。また釈迦の比喩。▽本地の釈迦の教えが比叡山に照り輝いていること。

〇2秋篠月清集・神祇部一五八四、続後撰・神祇五六八。各社一番右歌も左の新作歌に応じて詠まれた新作歌。○鶴の林：釈迦涅槃に際し、その沙羅双樹が鶴の林のごとく白く変じたという。「爾時拘尸那城沙羅双樹、其林変白、猶如白鶴」（涅槃経）。「薪尽き雪降りしける鳥辺野は鶴の林の心地こそすれ」（後拾遺・哀傷五四四 法橋忠命） ○にほひ：釈迦の教えの比喩。▽釈迦入滅の後も、真実の教えを説き続けていること。

○秋津嶋：日本国の異称。○ならひ：習慣。○ことわざ：行為。しわざ。○跡を垂れ給神仏：本地仏が我が国では仮に神の姿となつて現れること。本地垂迹。○思ひ分くべかりけん：物事を分別することができたであろうか（できはしない）。○底本「三百首」。他本にて「二百首」と修訂。○七の御社：日吉上七社。○おほせかくる：「言ひ掛く」の尊敬語。無理なことをおとしやる。○結縁：仏道に縁を結ぶこと。○本意なくもなりぬべく：せっかくなこの歌合を企画した人の本意も失われ。○かくれての恐れも有ぬべし：表面に現れずにある神仏の冥慮に対して恐れ慎むことになるであろう。○知り顔：知っているような顔つき。○未得為得未證為證の罪：他本では「為」を「謂」に作る。増上慢の罪。「此輩罪根深重、及増上慢、未得為得、未證為證」（法華経「方便品」）。○さりがたくなりぬべけれど：避けがたく。免れにくく。○痴狗塊を逐ひ：痴狗は愚かな犬。結果ばかりに囚われ因縁を求めない迷愚の比喩。「一切凡夫、惟観於果、不観因縁、如犬逐塊不逐於人」（涅槃経）。○犛牛の尾を愛する：犛牛は立髪

の長いヤク。本質を忘れ、つまらない物に執着する愚かさの比喩。「深著於五欲、如犛牛愛尾」（法華経「方便品」）。○和光同塵：神仏が衆生を救うために威徳の光を和らげて俗塵に交わること。○みそなはし：「見る」の尊敬語。御覧になる。

二番

左勝

〇3 志賀の浦にいつゝの色の浪立て、天降りけるいにしへの跡
右

〇4 おほけなくうき世の民におほふ哉わが立つ袖の墨染の袖

此右の哥は、はじめの五文字より心おほきに籠りて、末の句までいみじくをかしく侍を、左の志賀の浦の浪の色、殊に身にしむ心地して、「いにしへの跡」、なほ立ち勝るべくや侍らん。

〇5拾玉集・当座百首・雑一四八四1484、新勅撰・神祇五五八 ○いつゝの色の浪：大宮権現が大和三輪から近江坂本に移つて来た時の伝承。「大宮権現、まづ大津与多崎の八柳のもとに落着き給ふ。（中略）さて唐崎よりして五色の波を尋ねて登り給ふ事は三川のほとりなり」（耀天記）。○天降りける：下界に降りてきた。「君が世に天下りける神なれば千歳の松の中にこそ祝へ」（道長集七三） ▽大宮権現が志賀の浦の「五つの色の浪」を立てて、志賀に降り立ったこと。

〇6拾玉集・日吉百首・雑四九九599、千載・雑一一三七、百人一首 ○おほけなく：畏れ多いことに。慎みもなく。○おほふ：広く包む。保護する。○わが立つ袖：比叡山延暦寺の異名。「阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我が立つ袖に冥加あらせ給へ」（和漢朗詠・仏事六〇二 最澄） ○墨染の袖：僧衣の袖。「墨染」に「住み初め」を掛けるか。▽仏道に専心する青年の将来に対する抱負や希

望を詠じたもの。

○をかし：歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。○殊に身にしむ：思想内容があっても大げさな歌より、素直な情感の身にしむ歌を勝とする。

三番 立春

左勝

05 浅緑春は霞に立田山夜半にや年もひとり越えけん

同題

右

06 吉野山初春風の今朝はまづ桜が枝をいかゞ訪ふらん

左は立田山の夜半の霞、右は吉野山の春の風、所さまも哥の姿も共に艶には侍を、なほ左の「夜半にや年も」といへるわたり、勝ると申べくや侍らん。

05 拾玉集・廿題百首・立春二〇一〇（ナシ）、三百六十番歌合・春五

本歌「風吹けばおきつ白浪立田山夜半にや君がひとり越ゆらん」（古今・雑九九四 読人不知）○浅緑：薄い萌葱色。霞の色の形容に用いられる。○立田山：大和国の歌枕。生駒郡斑鳩町竜田。本歌では白浪が「立つ」を掛けるが、ここでは春の「立つ」に掛ける。

06 拾玉集・廿題百首・立春二〇〇九（ナシ）○吉野山：大和国の歌枕。桜の名所。○初春風：初めて吹く春風。「吉野山初春風を

思ふかなまだしき枝をいかにとふらむ」（拾玉集四七八四4469 「建久八年」詠）▽立春となった今朝、初春風はどのように花の枝を尋ねるのかという。

○姿：心と詞との統合体として歌を論じる時の語。「風体」「風姿」も同じ。○艶：上品で優雅な美しさ。余情美の一樣相。

四番 山ふかくすむ比、花を見て

左

07 柴の戸に匂はん花はさもあらばあれ眺めてけりなうらめしの身や
出家後、花をみて

右勝

釈阿

08 雲の上の春こそ更に忘れね花は数にも思ひ出しを

左哥、心かぎりなく深くこそみえ侍れ。右哥は昔より詠めりけん哥七首、結縁のためにしたてまつれと侍しうち
の哥にこそ侍けれ。この哥、ことなる事侍らず。たゞ「花は数にも」といふ末句ばかり、ことよろしく思給てしるしたてまつりけるに侍り。たゞし、いさゝかも飾りたることなく申べき由侍しかば、末句ばかりはすこしは宜にや侍らん。返々かたはらいたく侍り。

07 拾玉集・御裳濯百首・春五一二五12、新古今・雑一四七〇 ○柴

の戸：雑木で作った粗末な戸。隠者の庵の様。○さもあらばあれ：不本意だが、そうであるならば、それでもよい。○うらめしの身や：口惜しい我が身よ。▽出家の身から俗世間への未練を悔恨し、自責する。

08 長秋詠草・右大臣家百首・花五〇一、千載・雑一〇五六 ○雲の上の春：禁中での花宴などの春遊。○さらに：（否定語を伴って）決して。全然。○数：指を折って数えられるほどの価値ある程度。▽華やいだ宮中生活への懐旧を詠じたもの。

○昔より詠めりけん哥七首：俊成が本歌合に加えるために自撰した旧詠七首で、自讃の歌と見てよい。○かたはらいたく：心苦しい。自歌を勝としたからである。

五番 更衣

左持

09 散り果てゝ花の陰なき木本に立つ事やすき夏衣かな

卯花

10 此比は桜が枝に雲晴れて卯の花垣に月を見るかな

右

左は、かの躬恒が「春を思はぬ時だにも立つことやすき」と云哥を更衣にひきよせて、「立つことやすき夏衣かな」と侍、まことにをかしくこそ侍れ。右又、「桜が枝に雲晴れて卯花垣に」月をみん心、いみじく見え侍れば、旁心うつりて、いづれを勝と申がたくなん。

09拾玉集・四季雑各廿首都合百首・夏三一九二2979、新古今・夏一七七 本歌「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の陰かは」(古今・春一三四 躬恒) ○花の陰：花の反射光をもいうが、本歌と同じく下陰と解して良い。○立つ事やすき：本歌では立ち去る、立つの両解あるが、ここでは樹下に立つこと。「夏立つ」の意を掛け、さらに「裁つ」を掛ける。

10拾玉集四六一三4298、三百六十番歌合・夏一四八 ○雲晴れて：桜を雲に見立てて、桜が散り果てたこと。同時に、月を隠してきた雲が無いことを示す。「桜花咲きにけらしなあしひきの山の峽より見ゆる白雲」(古今・春五九 貫之) ▽花の季節が去り、卯花の垣根越しに月を見ること。○をかし：歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。○旁：あれやこれや。副詞。

六番 秋哥の中に

左勝

11 草木まで秋のあはれを忍べばや野にも山にも露こぼるらん

右

同

12 野辺ごとに花の袂のしをるれば露にぞ見ゆる秋のあはれは

左右の露のあはれ、心・姿、いづれとなくは侍を、しひて吹毛に侍れば、右の哥、中句に「しをるれば」といひ、下の句に「秋あはれは」と侍けるを見給へ出だして、哥合にかやうの事までは答とせぬ事も侍れど、是に事をよせて、左猶勝ると申べくやとぞ覚え侍る。

12拾玉集・堀河院題百首・秋二四五〇、千載・夏二六三 ○草木まで：草木を擬人化したもの。「草木まで思ひけりとも見ゆるかな松さへ藤の衣着てけり」(後拾遺・雑六二三 僧正行尊) ○忍べばや：「ばや」は活用語の已然形に付いて、「くので、くなのだろうか」の意。○野にも山にも：都・里を対比して含意。○露：涙に対応した表現。▽野山草木は釈教用語であり、宇宙万物の情の表象としての露の詠出に作意が見られるが、配列から通常の擬人詠に解しておく。

12拾玉集・四季雑各廿首都合百首・秋三二一九3006 参考「かりにのみ人の見ゆれば女郎花はなの袂ぞ露けかりける」(拾遺・秋一六六 貫之) ○花の袂：花を衣の袂に見立てたもの。○しをるれば：ぐつしより濡れると。「しをる」は「花」の縁語。○露にぞ見ゆる：露一点に凝縮されて見える。▽「秋のあはれ」は草花の露の中に感じると同時に、涙で袂を濡らす男女の別れを思わせる。

○心：詞に対応する語で、ここでは表現されるべき素材的な内容。○吹毛：「吹毛求疵」(韓非子)の略。毛を吹き分けて小さな疵を探し求める意から、ちよつとした過ちを厳しく指摘すること。○秋のあはれは：底本「秋あはれは」を修訂。○かやうの事：中句に「くれれば」、下句に「くは」という言い方を重ねること。○答：欠点。過失。○事をよせて：かこつけて。

七番 大宮の橋殿にて

左持

13 照る月の光と共にながれ来て音さへ澄める山川の水
月あかき夜、大嶽をのぼるとて

右

14 大嶽の嶺ふく風に霧晴て鏡の山に月ぞくもらぬ
「嶺ふく風に霧晴て」といひて、鏡の山見渡されんほど、
まことに姿も高くは待を、左哥、「光と共にながれ来て音さ
へ澄める」と侍る、山川の景色、なほ限りなくや侍らん。

15 拾玉集・日吉百首・秋四三九439、続拾遺・秋三〇二 ○橋殿：
崖・谷などに、橋のように掛け渡して作った家屋。○左持：他
伝本「左勝」。○音さへ澄める：川水が月光に照らされて澄んで
見えるだけでなく、音までも澄んで聞こえる。○山川（がは）：
山の中の川。ここでは大宮を流れる三津川（みつ）。なお、清音
では山と川の意。

16 拾玉集五四三5117、新勅撰・雑一三〇五、寂蓮集二一一 ○大
嶽：比叡山の主峰で四明岳の北東の山。大比叡とも言い、平安期
には比叡山の僧坊があった。○鏡の山：近江国の歌枕。蒲生郡
竜王町と野洲郡野洲町の境にある雨乞岳竜王山あたりの総称。
「鏡」に見立てることが多い。○霧晴れて：風で霧が吹き飛ばさ
れて。○月ぞくもらぬ：「くもらぬ」「霧晴て」は鏡の縁。▽他
伝本（高・東・神など）では「左勝」、従うべきか。

八番 月哥の中に

左持

15 月影の入ぬる跡におもふ哉迷はん闇の行末の空

同

右

15 帰り出で、後の闇路を照さん心にやどる山の端の月

此左右の哥、又「入ぬる跡におもふ哉」といひ、「心にやど
る山の端の月」と侍、姿・心共に深くして及びがたく侍。
仍持と申べくや。

16 拾玉集・日吉百首・秋四四三443、千載・雑一〇二一 ○入ぬる跡
：月の入ってしまつた後の闇の空。○迷はん闇：今後迷い続け
るであろう無明長夜の闇。「む（ん）」は仮想。▽月の落ちた後の
闇夜が迷妄晴れやらぬ未来の闇を想起させるといふ。

17 拾玉集・花月百首・月一三八三1383、続後撰・釈教六二一 本歌
「暗きより暗き道にぞ入ぬべき遙かに照らせ山の端の月」（拾
遺・哀傷一三四二 和泉式部） ○「同」：底本にナシ。他伝本
にて補足。○帰り出でて：一旦は沈んでしまつた月が戻つてき
て。○後の闇路：人間が死後に行かなくてはならない暗闇の世
界。○山の端の月：真如の月。衆生の迷いを開く仏法の真理を、
闇夜を照らす月に喩えた。

九番 冬哥中に

左勝

18 眺めわびぬ立田の里の神無月木葉ふみ分訪ふ人もがな

同

右

18 霜さゆる山田の畦の村薄刈る人なしみ残る比かな

左哥「立田の里の神無月」、まことに心ほそく思ひやられ侍
り。「木葉ふみ分」といふことぞ古今にも侍を、円位と申上
人も詠みて侍しかど、是は「立田の里」、珍しくも侍れば、
猶勝り侍らん。

17 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・冬三二四一3028、無名和歌集・

冬三七 ○眺めわびぬ…もう物思いをすることに堪えられない。
 ○立田…大和国の歌枕。生駒郡斑鳩町竜田。紅葉の名所。ただし「立田の里」は慈円以前の用例は無い。○神無月…陰暦十月の称。ここでは月そのものも掛けるか。○木の葉ふみ分…ここでは紅葉の落ち葉。○訪ふ人もがな…尋ねてくれる人があつたらなあ。▽冬の山里の人恋しさ。

18拾玉集・四季雑各廿首都合百首・冬三三三六3023（第四句「なしに」、新古今・冬六一八、無名和歌集・冬四九 ○霜さゆる…霜が置いて冷えこむ。○畦…畔（あぜ）「畔クロ、ウネ」（名義抄）○村薄…薄の群れ。○刈る人なしみ…「なしみ」は「なみ」の誤用。刈る人がないので。異文「なしに」でも同じ意。▽畦に残った薄を通しての荒涼とした冬の様子。

○心ぼそく…もの寂しく。マイナス評価ではなく、美的価値として肯定されたもの。○古今にも侍…「秋は来ぬ紅葉は宿に降り敷きぬ道ふみ分て訪ふ人はなし」（古今・秋二八七 読人不知）○円位と申上人も詠みて…円位は西行法師のこと。「霜さゆる庭の木葉を踏み分けて月は見るやと問ふ人もがな」（山家集五二二）

十番 冬哥中に

左勝
 19 難波潟松の嵐に雲きえて月の氷に鴛鴦ぞ立つなる
 千鳥

右
 20 与謝の浦ひとり浮き寝の梶枕たゞ我がための友千鳥哉
 左の難波潟、右の与謝の浦、所のありさま、共にをかしくは思やられ侍を、猶、月の氷に立つらん鴛鴦の羽風、心・姿、今少し艶にや侍らん、左勝ると申べくや。

19拾玉集・四季雑各廿首都合百首・冬三二四五3032、無名和歌集・

冬三九 ○難波潟…摂津国の歌枕。淀川の河口周辺のこと。
 ○松の嵐…松の木末をわたる烈風。○雲きえて…月を覆っていた雲が嵐に吹き飛ばされて。○月の氷…月光のあたる水面を氷に見立てる。「敷き渡す月の氷をうたがひてひびの手まわる味鴨（あぢ）のむら鳥」（山家集一四〇四）○鴛鴦…雄の冬羽は特に美しい。雌雄が常に並んでいることから、夫婦仲の良いものに譬えられる。○立つなる…「なる」は伝聞・推定の意。飛び立っているようだ。

20拾玉集・十題百首・鳥一五六一（ナシ） ○与謝の浦…丹後国の歌枕。与謝郡の宮津湾。天の橋立の砂嘴の内外の海をいう。○浮き寝…水鳥が水上に浮かんだまま寝ること。またそれに喩えて船上で寝ること。「憂き」を掛ける。○梶枕…梶を枕にして寝る意から、船路の旅。○友千鳥…群をなす千鳥。「ひとり」に応じる。▽船旅での友は千鳥だけという。
 ○をかし…歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。○艶…上品で優雅な美しさ。余情美の一様相。

十一番 初恋

左持
 21 君が宿の萩の上葉のいかならん今日聞きそむる恋の初風
 寄風恋

右
 22 心あらば吹かずもあらなんよひくに人待宿の庭の松風
 左右哥、けふ聞きそむらん「恋の初風」、「人待つ宿の庭の松風」、共に姿・心かぎりなくみえ侍。いみじき持に侍べし。

21拾玉集・廿題百首・初恋二〇六〇（ナシ） ○萩の上葉…萩の上の方の葉。恋人の便りを待つ思いを風に寄せて詠む。「さりともと

思ひし人は音もせて荻の上葉に風ぞ吹くなる」(後拾遺・秋三二一三條小右近) ○聞きそむる…底本「吹そむる」を判詞などから「聞きそむる」に修訂。

22 拾玉集・歌合百首・恋一七六三1663 (第二句「ふかずともあらなむ」)、新古今・恋一三一一、六百番歌合・恋九三四 ○心あらば…もしお前に心があるのなら。○吹かずもあらなん…吹かないでいてほしい。○よひ…宵。男の通ってくる時分のこと。○松風…「待つ」に掛ける。恋人を待つ身には沁みる風。○いみじき持…優れた持。双方共に優れた歌と評価した上での持。

十二番 述懐

23 世中を今はの心つくからに過にし方ぞいとど恋しき

左勝 同

24 世をいとふ心の深くなるまゝに過る月日をうち眺めつゝ
両首の述懐、いづれを勝ると申がたくは侍れど、同じの
みもいかゞとて、左の「今はの心」、今少し勝ると申べくや
侍らん

23 拾玉集・楚忽第一百首・懐旧七九七97、新古今・雑一八二三
本歌「明けぬとて今はの心つくからになど言ひしらぬ思ひ添ふらむ」(古今・恋六三八 国経) ○今はの心…もうこれまでだと思ふ心。○つく…定着するの意。○からに…原因・理由の表現。▽出家を決意したので、過ぎ去った昔を恋慕う。恋歌に使われた「今はの心」を在俗から離れる状況に転用したことが、俊成に評価されたか。

24 拾玉集・日吉百首・述懐四七四474 (第五句「うちかぞへつつ」)、
新古今・雑一八二四 (第五句「うちかぞへつつ」) ○うち眺め

つゝ…ぼんやりと見つめながら。異文「うち数へつつ」では単に数えながらの意。▽出家の志が固まってゆくが、まだ心の準備が伴っていないさま。

十三番 無常

25 長夜の夢の別とおもへども又此世には逢はんものかは

左勝 同

26 昨日みし人はいかにと驚けどなほ長夜の夢にぞ有ける
左右無常、心・姿、共に有がたくこそみえ侍れ、「又この世には」といひ、「人はいかにと驚けど」といへる、いづれを勝ると申がたくは侍れど、猶左の哥、別の心、あはれかぎりなく侍るにや、よりて左勝侍と申べくや。

25 拾玉集・御裳濯百首・無常五七七577 ○長夜…いつまでも続く煩悩の闇。仏教語「長夜」の訓読。○夢の別…夢のようにはかない別れ。人の死。○ものかは…ことであろうか。反語。▽此の世ではもう巡り逢うことができないというはかなさ。

26 拾玉集・北山樵客百首・述懐一九九二891、新古今・哀傷八三三
○人は…他人のことについては「驚けど」、自分自身は「なほ長夜の夢にぞ有ける」。○いかにと…どうしてはかなく死んでしまったのかと。○長夜の夢…長い夢のような、凡夫の迷いの世界。▽他人の死をみても、自分だけは出家に至らず俗世間から逃れられないこと。
○あはれ…しみじみとした情趣。

十四番 報恩舍利講に
左勝

27 今日の法は鷲の高根に出し日のかくれて後の光成けり

同

28 諸人の埋もれぬ名をうれしとや昔の下にも今日はみるらん

右

左の「鷲の高根」の哥のたけ、誠に及がたく、右の「昔の下にも」といへる、又あはれもかぎりなくは侍れど、猶「かくれて後の光成けり」と侍、ことに珍らしくも侍にや、左勝るべくや。

27拾玉集（未見）。新勅撰・釈教五九四 ○報恩舍利講：仏舍利を供

養する法会。供物を献じて回向し、その功績を讃える。○今日

の法：今日の法筵での仏法。○鷲の高根：釈迦が法華経を講説

したという霊鷲山。「今日ぞ知る鷲の高嶺に照る月を谷川汲みし人の陰とは」（金葉・雑六三六 師時） ○出し日：釈迦を指す。

○かくれて後：釈迦入滅のこと。▽「常在霊鷲山」（法華経・寿

量品）を詠んだもの。釈迦入滅の後も霊鷲山で常に在り、法華経

を講説していること。

28拾玉集四七二〇4405（初句「むかし人」、新勅撰・雑一二六四

○諸人：多くの人々。異文「むかし人」では昔に親しくしていた

人の意。○埋もれぬ名：死後も埋もれることのない名前。「龍門

原上土、埋骨不埋名」（白氏文集・二二二七） ○昔の下：墓の

下。▽死後も埋もれない名の世に残ることを嬉しく思うこと。

○たけ：歌の格調・風格。○あはれ：しみじみとした情趣。

十五番 塵點本を

左持

29 ある塵の積りて高くなる山の奥より出し月をみる哉

右

未頭真実

30 胸の月は今日の御空を待とてや四十の雲に雲隠れけん

左の塵點の山、右の「四十の雲」、ともに勝劣難分、同鉢

とすべし。

31 身のうきは日吉の山も雲やおほふ心の闇に猶迷ふらん

29拾玉集（未見）。新勅撰・釈教五九七 ○塵點本：「塵點劫」。測

り知ることのできない長い時のことで、釈迦の久遠を喩えたも

の。○ある塵：留まる塵。○月：真如の月。永久不変の真理。

また釈迦の比喩。▽塵積もりて山となることを塵點に喩えたも

ので、釈迦の教えが無数劫も信じられること。

30拾玉集（未見） ○未頭真実：五時（華嚴・鹿苑・方等・般若・

法華涅槃）の内、般若時までの釈迦の説法、すなわち『法華経』

以前の諸経には、まだ真実の教えが顕されていないということ。

○胸の月：悟りすました心を月に喩えたもの。「胸の月心の水もよ

なよなの静かなるにぞ澄みはじめける」（続古今・釈教七六一 土

御門院） ○今日の御空：やつと真実の教えが顕れた今日。○四

十の雲：煩惱に迷う心を月を隠す雲に喩えた。空・雲は月の縁

語。建久九年は慈円四四歳。▽真実の教え（法華経）が顕れるま

で、迷妄に迷っていたこと。

〔長秋詠草（未見）。各社末尾の俊成歌は本歌合のための新作歌で、判

者としての感懐を詠じたもの。○日吉の山：日吉大社のある山

（比叡山）のこと。○雲やおほふ：煩惱に迷う心を雲が覆うこと

に喩えた。○心の闇：煩惱に迷う心。▽日（日吉）を雲が覆い、

闇となるという比喩。

小比叡十五番

一番

左持

32 やはらぐる影そ麓にくまもなきもとの光を峯に残して

右

撰政

33 朝日さす其方の空の光こそ山かげてらすあるじ成けれ

左哥、和光の影、麓にくまなく、右哥、東方の光、地主とあらはれます。心ともに勝劣なし。同科と申べし。

▽小比叡：二宮。神体は大山咋神で、この山の地主権現。本地は薬師如来。

32 拾玉集（未見）。新古今・神祇一九〇一（第三句以下「曇りなきもとの光は嶺にすめども」） ○やはらぐる：和光同塵の常套的表現。「影」は「光」の縁語。 ○麓：日吉大社は比叡山の麓近江坂本にある。 ○くまもなき：光が曇りや影もない。 ○もとの光：本地の薬師如来。 ○峯に残して：他伝本の異文「すめども」は「住め」「澄め」を掛ける。 ▽薬師如来の恩恵に麓にある日吉大社も与っていること。

33 秋篠月清集・神祇一五八五、新勅撰・神祇五五九 ○朝日さす其方：東方。薬師（瑠璃光）如来は東方淨瑠璃世界の教主。 ○山かげ：山のために陰となること。 ○あるじ：ここでは地主神。二宮の大山咋神のこと。 ▽大宮勧請の前はこの二宮が日吉の地主神であったこと。

二番 述懐

左勝

入道殿

34 おのづから誓ひの底を悟りえて人にすぎたる恵みをぞ侍

同題

右

35 松の門の跡を思はぬ身なりせばまことに家を出まし物を

右、まことに家を出る心もまことにしか有べき事に侍れど、猶左の「誓ひの底」深くや侍らん。仍勝とすべし。

34 兼実（未見） ○おのづから：たまたま。偶然。 ○誓ひの底：神

仏の衆生済度という誓願の真意。 ○人にすぎたる：過分の。不相应な。 ▽為政者として神の御加護を願うということ。

35 拾玉集・一日百首・述懐九九六396 ○松の門：「松門」の訓読語。閑居の草庵をさす。 ○まことに家を出：僧位までも捨て真に無一物の出家となる。 ○物を：けれども。のに。 ▽閑居した後のこと、つまり九條家の将来を案じるあまり、再遁世をすることができないという悔恨。

○しか有べき：当然そうであるべき。 ○深くや侍らん：「誓ひの底」は歌語としてというよりも、その内容が深いこと。

三番 春哥の中

左持

36 田子の浦の波に霞の色さえて春の湊に有明の月

春哥

右

釈阿

37 又やみん交野の御野の桜がり花の雪ちる春の明ぼの

此右の哥、又しるしたてまつり侍し内なり。これは「桜がり」と申事を人のあしく申かたの侍れば、事のついでに申きらむとてつかうまつれりし上に、少しはよろしきにやと思たまへ侍しを、この左の哥、「浪に霞の色さえて」といひ、「春の湊に有明の月」と侍こそ、いみじくをかしく見え侍れ。勝と申さまほしく侍れど、「交野の御野」もさすがに覚え侍りて、同科にてや侍るべからん。

36 拾玉集・四季雑各廿首都合百首・春三一八九2976（初句「秋もいさ」） ○田子の浦：駿河国の歌枕。現在は富士市田子の浦だが、古くは蒲原郡吹上の浜あたり。異文「秋もいさ」では秋はさあどうだろうかの意。 ○色さえて：浪には霞の色が澄み切って。

○春の湊に：彰・松本「みなとの」。この異文なら次の「有」は掛詞。「春の湊」は春の果て。春の行き止まる所を、船の泊まる湊に喩えた。「今までに残れる岸の藤波は春のみなどの泊まりなりけり」（貫之集二八六）

37長秋詠草（未見）。新古今・春一一四 ○又やみん：こんな美景はいつかまた見ることがあろうか。○交野：河内国の歌枕。現在の交野市だけでなく枚方市までも含めた広い範囲。皇室の狩場（御野）があり、桜の名所。○桜がり：桜見物。「桜を尋ね求むるなり。何を求めむるをば狩るといふ」（奥義抄・中）。鷹狩は冬のもので「御野」「狩」「雪」は縁語。○花の雪ちる：花が雪のように散る。「花の雪ちる」は禁制詞（詠歌一鉢）とする。▽老境にある俊成が「花の雪ちる」情景を見ての感懐。

○しるしたてまつり侍し内：俊成が自作中から選んで奉った七首の内。○あしく申かたの侍れば：誤解している向きがあるので。○申きらむとて：巷間の妄説に、はつきりと決着を付けようと思つて。○申さまほしく：申したいと。「まほし」は未然形に付き、願望を表す。○さすがに覚え：判者自身の歌であるが、負にしたくなかったか。自撰歌七首であるだけに俊成の執着も強い。

四番 花の哥中に

左勝

38 花故にとひくる人の別まで思へば悲し春の山風

同題

右

39 散花の古里とこそ成にけれわがすむ宿の春の暮方

左哥「とひくる人の別まで」といへる心、春の風のうらみ、まことにしかあるべきことに侍り。右哥、又末句などはいとをかしくみえ侍を、猶左少し勝るべくや侍らん。

38拾玉集・花月百首・花一三二九1329、新勅撰・春一一二、玄玉集・草樹五〇九、三百六十番歌合・春一一三（第五句「はるのやまざと」） ○花故に：花に惹かれて。「我が宿の花見がてらに来る人は散りなむのちぞ恋しかるべき」（古今・春六七 躬恒） ○別まで：風によって花との別れだけでなく、花を尋ねて来た人との別れまでも。○思へば悲し：よく考えてみると悲しく思われる。▽山風は花を散らすだけでなく、人との別れまで悲しくさせる。

39拾玉集・花月百首・花一三五1355、新勅撰・春一一三、玄玉集・草樹五五六 本歌「花もみな散りぬる宿は行く春のふるさととこそなりぬべらなれ」（拾遺・春七七 貫之） ○古里：古くなり荒れてしまった土地。○春の暮方：その日の暮と同時に春という季節の終わる頃。

○春の風のうらみ：春の風に対して恨みに思うこと。○しかあるべきこと：当然そうであるべきこと。○をかしく：歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。

五番 郭公

左持

40 郭公聞きつとやおもふ五月雨の雲の外なる夜半の一声

夏の哥

右

41 時鳥鳴く一声の夜半なれば秋には宵の有明の月

左右両首共に心深くして勝劣不分明、持とすべし。

40拾玉集・楚忽第一百首・郭公七二五725、新勅撰・夏一七三（第五句「そらのひとこ多」） ○聞きつとやおもふ：今まさに聞き得たと思うだろうか。「思ふ」の主体を郭公と考えて、「や」は疑問と解した。○雲の外：ここでは五月雨の厚い雨雲の彼方。「一声山

鳥曙雲外、万点水螢秋草中」(和漢朗詠・郭公一八二 許渾)

41 拾玉集・四季雜各廿首都合百首・夏三二一〇2997 ○一声の夜半なれば…夜半に郭公の一声が聞こえるが。○秋には宵の有明の月…秋という季節のように宵から有明の月が空に浮かんでいる。▽夏廿首中の十九番目の歌なので、夏の終わりに秋を待ち望む心が「秋には宵の」という表現になったか。

六番 秋哥中に

左勝

42 身にとまる思ひを荻の上葉にて此比かなし夕暮の空

鹿哥

右

43 むべしこそ此比ものはあはれなれ秋ばかり聞く小牡鹿の声

両方秋の心、いづれ勝ると思分きがたく侍れど、猶左の「思を荻の」といへる心、勝るべくや侍らん。

42 拾玉集四三三九4025、新古今・秋三五二 参考「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」(和漢朗詠・秋興二二九 義孝少将) ○身にとまる思ひ…我が身から留まって離れていかない物思い。○荻の上葉…風による葉ずれの音が秋の哀れを誘う。「さりともと思ひし人は音もせで荻の上葉に風ぞ吹くなる」(後拾遺・秋三二一 三條小右近)

43 拾玉集四九一一4596、新勅撰・秋三〇四 参考「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」(古今・秋二一五 読人不知) ○むべしこそ…なるほど当然で。○秋ばかり聞く…「ばかり」は限定を表す副助詞。秋だけ。▽鹿の鳴き声は秋に聞くと哀れに感じられる。

○とへる…他伝本に抛り「といへる」と修訂。○勝る…「勝り」を他伝本で修訂。

七番 月の哥あまたよみける中に

左勝

44 清見瀉月の光のさえぬれば波の上にも霜は置けり

同

右

45 うち寄する浪に有明の月さえて秋や悲しき須磨の関守

左の清見が関、右の須磨の関、所さまも月の光のあはれんきがたく侍るにとりて、左の「波の上に霜は置けり」といへる心、猶珍らしさもかぎりなくみえ侍り。仍左勝ると申侍べし。

44 拾玉集・花月百首・月一三七四1374、玄玉集・天地一四五 ○清見瀉：駿河国の歌枕。清水市興津から三保の崎にかけての海岸。月の名所。○霜…波の上を照らす月光の冴え冴えとしたさまを霜に見立てたもの。「白妙の衣の袖を霜かとして払へば月の光なりけり」(後拾遺・秋二六〇 国行)

45 拾玉集四二九四3980、三百六十番歌合・秋三六四 参考「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守」(金葉・冬二七〇 兼昌) ○須磨…摂津国の歌枕。神戸市須磨区の海岸。古くは関所があった。

○所さま…名所の状態。○とりて…くに関連づけて考えると。○左…底本では「右」となっているが、「左」に訂正。

八番 秋田を

左勝

46 わきてなど庵もる袖のしをるらん稲葉にかぎる秋の風かは

秋の哥中に

右

47 粟津野の尾花が下に吹きこめて風に波こす山嵐かな

此の両首、又更に甲乙分かちがたく侍り。右は「尾花が下に吹こめて」といへる、心ことにをかく侍を、強ての事に初五字や少しさへて侍らん。左の姿、ことに始終おろかなる所なく侍にやとて、猶左勝ると申べくや侍らん。

46拾玉集・歌合百首・秋田一七六八1668、新古今・秋四五三、六百番歌合・秋三九四 参考「穂にも出ぬ山田をもると藤衣稲葉の露に濡れぬ日はなし」(古今・秋三〇七 読人不知) ○わきてなど：とりわけなせ。○庵もる袖：庵で番をしている私の袖。○かぎる：範圍を決める。○かは：反語。強い否定。▽稲葉の露に濡れ、涙に濡れる寂しく辛苦の多い田守の嘆き。

47拾玉集・北山樵客百首・秋一八六五1765 ○粟津野：近江国の歌枕。大津市膳所。尾花・萩など秋の景物を詠んだ叙景が多く詠まれた。○尾花：花の形が尾に似ていることから、薄の穂。秋の七草の一つ。○吹こめて：風が吹き入れて。○風に波こす：風によつて、尾花が揺らぎ、まるで白浪が立っているように見える。○をかしく：歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。○強ての事：あえて言うとしたら。○さへて：流れを妨げて。▽「粟津野の」は一般的に「逢はず」を掛けるといった印象が強いで、却って歌の姿を妨げるといふ判詞か。

九番 冬哥中

左持

48 月を思ふ秋の名残の夕暮に木陰吹はらふ山おろしの風

月あかりける夜、三位入道もとへ

右

49 霜枯れの籬の薄秋にかへて同じ御空の月をみる哉

右哥、もとよりかぎりなく思給へ侍りしを、左哥「木陰吹はらふ」といへる、心又おとるやとみえず侍れば、同科

とすべくや。

48拾玉集・四季雜各廿首都合百首・冬三二二九3026、新勅撰・冬三九〇、無名和歌集・冬五一 ○秋の名残：秋の終わりの風情。冬になったのに秋と同じように月を思うことをそう言った。「いかに秋の名残を眺めまし今朝は木の葉に嵐吹かずは」(千載・冬三八八 俊頼) ○木陰吹はらふ：秋であれば葉を吹き払ったであろうに、葉の散り果てた冬には木陰を吹き払うしかないさま。

49拾玉集五七二九522(初句「霜かる」)、無名和歌集・冬一 ○三位入道：俊成のこと。○霜枯れ：異文「霜かる」も同じ意。霜に枯れた。「霜枯れの枝となわびそ白雪の消えぬ限りは花とこそ見れ」(後撰・冬四七六 読人不知) ○籬：柴などで粗く編んで造った垣根。○秋にかへて：秋に置き替えて。秋だと見なして。○同じ御空：あなたが見ているものと同じ空のこと。▽冬の情景を秋と捉え直して、月を見る。拾玉集詞書には「十月下旬在明月いつよりもめでたかりしをながめて風情あまたいできたれば」とあり、秋の月を意識したか。○思給へ侍し：東大本に抛り底本「思ふたて」を修正。思い申し上げていましたかの意。

十番 寄雲恋

左勝

50 恋しぬる夜半の煙の雲とならば君が宿にや分て時雨ん

同

右

51 雲さわぐ夕の空を君はよもわが焚く火とは眺めざるらん

左右、恋の心ともに甚深にして勝劣なく侍れど、左の「分て時雨ん」といへる末句、なほ勝り侍らん。

50 拾玉集・歌合百首・寄雲恋一七六二(592)、新勅撰・恋九九三、六百番歌合・恋九一八 ○恋しぬる…恋い焦がれて死ぬ。○煙とならば…茶毘に付す煙が雲となるならば。○分て時雨ん…特に選んで時雨れたいものです。▽夢の中で神女と契りを結ぶという故事(「且為朝雲、暮為行雨」文選・高唐賦)に拠る。「朝雲暮雨」は男女の情交のこと。

51 拾玉集・当座百首・寄雲恋一四五七(457) ○雲さわぐ…雲が乱れ動く。○よもぐず…よもやくではないだろう。○焚く火…自分が焚いている火によって立つ煙。

十一番 述懐

左

52 ひとかたに思(おもひ)とりにし心にはなほ背(そむ)かるゝ身をいかにせん

同

右勝

53 思はねど世(よ)を背(そむ)かんといふ人のおなじ数にや我(われ)も入(い)らん

両方述懐、心は共に深く侍れど、右哥、勝るべくや。

52 拾玉集・北山樵客百首・述懐一九八六(1885)、新古今・雜一八二五 ○ひとかたに…一方へ。○思とりにし…出家を心に思い定めた。○背かるゝ…おのずと心に背く意。これまで通り動こうとする身と対立させる。▽世を遁れることに決めた心なのに、身はそれとは逆の動きをするということ。

53 拾玉集(未見)。新古今・雜一七四七(第五句「我もなるらむ」) ○思はねど…意識しては思わないけれども。○世を背かんと…此の世を遁れようと。○数…物の数。○入なん…入ってしまふに違いない。異文「なるらむ」ではなってしまうに違いないの意。▽世を遁れようと口に出して言う人とは一線を画したいか。さらに出世間的な立場に戻りたいと願う慈円の心境。

○まさるべくや…他本に拠り、「まさるべく侍らん」を修正。

十二番 同

左

54 草の庵をいとひても又いかゞせん露の命のかゝるかぎりは

同

右勝

55 都にも猶山里(あり)は有ぬべし心と身とのひとつなりせば

左哥「いとひても又いかゞせん」などいへる、心・姿(すがた)をかくしくは侍(はべ)る、右哥「都にも猶山里(あり)は有ぬべし」といふ心、ことに珍(めづ)らしくもみえ侍(はべ)る。右勝るべくや。

54 拾玉集・御裳濯百首・雜五八六(586)、新古今・雜一六六一 参考

「世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ」(古今・雜九五六 躬恒) ○露の命…露のようにはかない命。露は草の縁語。○かゝる…露がかかる意に掛ける。▽此の身のある限り、現世を「憂き」と感じてしまふ定め。

55 拾玉集・当座百首・山家一四九八(1498) ○有ぬべし…有るに違いない。○ひとつなりせば…心と身が一つのものになったならば。煩惱を厭う心に対して、心は濁世から遁れたいと彷徨い出がちなあるが、それが一つになると。▽「大隠住朝市、小隠入丘樊」(白氏文集・中隠二二七七)などに拠る。○をかし…歌論用語。表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。

十三番 病にわづらひける比

左

56 頼(たの)めこし我(われ)ふる寺の苔の下にいつしか朽(く)ちん名(な)こそ惜(をし)けれ 世をいとふ心深(ふか)きよしなどかたりし事を思(おも)ひ出(い)で、円位

上人がもとへ遣ける

右勝

57 世をいとふしるしもなくて過こしを君やあはれと三輪の山本

この番ひ、又共にしかあることには侍を、右の「三輪の山本」、猶、をかしく聞こえ侍。又右勝りと申侍らん。

56 拾玉集 (未見) ○頼めこし：長らく期待を抱かせてきた。○苦

の下：草葉の陰。墓の下。○いつしか朽ちん：いつの間にか朽ちることだろう。○名こそ惜しけれ：名前だけが惜しく思われる。「龍門原上土、埋骨不埋名」(白氏文集・二二一七)

57 拾玉集 (未見) 本歌「我が庵は三輪の山本恋しくはとぶらひ来

ませ杉立てる門」(古今・雑九八二 読人不知) ○円位上人：西

行法師のこと。○世をいとふ：世を通れたいと思う。○しるし

：目じるし。「三輪の山しるしの杉はありながら教へし人はなくて

幾世ぞ」(拾遺・雑四八六 元輔) ○過こしを：過ごしてきたの

に。「杉」を掛け、「杉」は「三輪」の縁語。○君やあはれと：君

はかわいそうだと。三輪に「見(る)」を掛ける。問い掛けの表

現。○三輪の山本：大和国の歌枕。桜井市三輪。三輪山全体を神

体とする大神(みわ)神社で有名。

○しかあること：当然そうであること。○をかしく：歌論用語。

表現された構想・内容の面白さを誉めていう批評語。

十四番 月哥中に

左勝

58 木本に月も光をやはらげて秋さびわたる嶺の秋風

九月に無動寺にて報恩講おこなひてよめる

右

59 さとり行雲は高嶺に晴にけりのどかに照せ秋の夜の月

右の「雲は高嶺に」といへる、姿・心及びがたくは侍れど、

左の「月も光をやはらげて」といへる、「嶺の秋風」、なほ身にしむ心ちし侍。仍左勝ると申べくや。

58 拾玉集・花月百首・月一三九九(399) (第四句「神さびわたる」)、

新統古今・神祇二一三 (第四句「神さびわたる」) ○月：真

如の月。永久不変の真理。また釈迦の比喩。○光をやはらげて：

和光同塵の常套的表現。○秋さびわたる：次第に秋らしくなる。

「わたる」は動作が空間的・時間的に連続する意を表す。異文

「神さびわたる」では神々しい様子をしているの意。「秋さび」で

は和光同塵の意から離れるか。

59 拾玉集四六五四(339)、新勅撰・釈教五九五 ○無動寺：比叡山東

塔無動寺谷にある道場。本尊は不動明王。若き日の慈円はここで

修行している。○報恩講：仏舍利を供養する法会。供物を献じ

て回向し、その功績を讃える。舍利報恩講とも。○雲は高嶺に

晴にけり：高嶺を覆っていた雲が晴れてしまった。○秋の夜の

月：真如の月。永久不変の真理。また釈迦の比喩。

十五番 金剛界五部よみける中に仏部

左勝

60 今は上に光もあらじ望月とかぎるになればひとときはの空

菩薩十度をよみける中に、智波羅蜜を

右

61 これぞきはうき身をやがて仏ぞと心得つべき心ちこそすれ

右哥「うき身をやがて仏ぞ」と侍も誠貴は侍れど、猶、左

十五夜月、なほ上なくや侍らん。

62 御山かははやきしるしを頼めども谷のつらゝの猶むすぶらん

60 拾玉集・廿題百首・釈教二一〇三(ナシ)、新勅撰・釈教五九六

○金剛界五部：金剛界曼荼羅の九会のうち、中央の羯磨会をさら

に蓮華部・金剛部・仏部・宝部・羯磨部に分けたもの。金剛界は大日如来の智の面を表したもので、大日如来の理の面を表した胎藏界の対。○今は上に：もうこれ以上に。○望月：十五夜の月。真如の月。欠けたところの無い境地。無上のもの。○かぎるになれば：(悟りの境地も)望月という極めの状態となると。○ひとときはの空：一段とすばらしい空。▽望月となれば、もうこれ以上の光はあるまいと詠む。

61拾玉集・十題百首・釈教一五九三(ナシ)(初句「これそさは」)
○菩薩十度：十波羅密のこと。彼岸に到達するために、菩薩が実践すべき修行をいう。○智波羅密：事理に於いて決断すること。○きは：限界、限り。異文「さは」ではそのようにの意。○うき身をやがて仏ぞと：つらく悲しいことの多い身をすぐさま仏にと。○心得つべき：必ず心得るべきである。▽最後には仏の記別を得ることを理想として、仏道修行にいそむこと。

62長秋詠草(未見) ○御山川：御山(叡山)の川。○はやきしるし：はやく頭れる靈驗。○谷のつら：靈驗などが頭れないこととの比喩。

聖真子十五番

一番

左持

63 こゝのしなの玉のうてなの光こそ三つのひじりの影となりけめ

右

64 道をかへて此世に跡を垂るゝ哉終はり迎へんむらさきの雲

左「玉のうてな」、右「むらさきの雲」、光色難分之上、共に為神事、無勝劣てや侍らん。仍持とすべし。

▽聖真子：大比叡と小比叡両所からの所生とされる。神体は宇佐八幡と同体で、本地は阿弥陀如来。

65拾玉集(未見) ○こゝのしな：仏教語「九品」の訓読。九品往生。極楽往生する者の性質・行為の差によって生じる九つの階位。○玉のうてな：極楽往生した人がすわる蓮の台。○三つのひじり：三聖(大比叡・小比叡・聖真子)のこと。山王三所とも。▽阿弥陀如来を信じる者は死後、極楽に迎えられる。

66秋篠月清集・神祇一五八六 ○跡を垂るゝ：本地仏が我が国では仮に神の姿となって現れること。○終はり：一生の終わり。最期。○むらさきの雲：阿弥陀如来などの諸仏が極楽から乗ってくる雲。来迎の雲。

○光色：前途を照らす指針。光明。○神事：神に関係する事柄。

二番

左持

67 もろ人の願ひをみつの濱風に心すゞしき四手のおと哉

右

68 わが願ふ其古に吹返せ聖の跡をはらふ谷かぜ

左の「濱風」、右の「谷風」、共に心もすゞしく、古へにもまことに吹き返すらむと見え侍れば、同じ科とすべし。

69拾玉集・日吉百首・雑四九八(初句「神がきや」、新古今・

神祇一九〇四、玄玉集・神祇三三 ○もろ人の：多くの人々の。

異文「神がきや」は神社を取り囲む垣根の意。○御津の濱：近江

国の歌枕。琵琶湖の日吉神社に近い湖畔。「満つ」を掛ける。○

心すゞしき：心の中がさっぱりとしたこと。「さざなみや志賀の浦

風いかばかり心の内のすずしかるらん」(拾遺・哀傷一三三六

公任) ○四手：標縄などに付けて垂らす紙。四は上の「御津

(三)の縁語。

70拾玉集(未見) ○古(いにしへ)：古き良き昔。仏法が王法と共に盛行していた聖代のイメージ。○吹返せ：「風」の縁語。

○聖の跡：叡山の高僧たちの足跡。「来にけらし見てしもみまく思ふ山聖の跡もさこそすみけれ」（拾玉集二一〇六（ナシ）「廿題百首」）

三番 霞

左

67 春霞富士のけぶりに宿かりて幾重の山を隔てきぬらん

橋上霞を

右勝

68 葛飾や昔のまゝの継橋を忘れずわたす春霞哉

両方の霞、左は「富士のけぶりに」宿かれる心、めづらしくは見えず、右は「葛飾の真間の継橋」は事古りたるやうには侍を、「昔のまゝの」と続け、末の句も事古りず聞えて、右勝ると申べくや。

67 拾玉集四六〇〇4285 ○宿かりて：宿を借りるように混じり合つて。○幾重の山：何重にもなった山。○隔てきぬらん：空間的に間をおいてどうしてやって来たのだろうか。

68 拾玉集・楚忽第一百首・雑七九一791（第四句「忘れずわたる」）新勅撰・雑一三〇二（第四句「忘れずわたる」）○葛飾：下総国の歌枕。その地域は広範にわたり、現在の東京都東北部と千葉県西端部、さらに茨城・埼玉両県の一部も含む。○まゝの継橋：地名「真間の継橋」と昔の「まゝ」を掛ける。真間の継橋は下総国の歌枕。市川市真間町。○忘れずわたす：失念せずに橋を架け渡す。異文「わたる」では橋の向こう側に渡るの意。「わたす」「わたる」共に「橋」の縁語。

○事古りたる：古めかしくなる。○昔のまゝの：普通の。変わらぬ。

四番 花

左勝

69 芳野山なほしも奥に花咲かばまたあくがるゝ身とや成なん

同

右

70 思へし今年ばかりとながめ来て四十路の春の花になれぬる

左右の花哥、右は初句をかしおかれ、四句春なれぬる心もあはれ多く侍を、左の「なほしも奥に」といへる心、殊にめづらしくも侍にや。仍、左勝るべくや侍らん。

69 拾玉集・御裳濯百首・春五二1313、新勅撰・雑一〇五一 ○なほしも：さらに一層。「しも」は強調の表現。○あくがるゝ：心から離れてさまよう。「もの思へば沢の螢を我が身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」（後拾遺・雑一一六二 和泉式部）

70 拾玉集・花月百首・花一三五二1352 参考「春ごとに花に心を慰めて六十あまりの年を経にけり」（聞書集一三二） ○今年ばかりと：今年で最後と。○四十路：慈円は当時三六歳。○なれぬる：すっかり馴れてしまった。○四句：四十歳のこと。句は十年を一まとまりとして年齢を数える言葉。

五番 五月雨

左勝

71 山里の雪には跡も厭はれき問へかし人の五月雨の比

夏哥とて

右

72 匂ひくる花たち花の袖の香に涙露けきうたゝねの夢

釈阿

この右哥、又七首が内に侍りけり。此はたゞ夢うつゝとな昔を偲ぶ心ばかりに侍り。左哥「雪には跡も」と言ひ、「問へかし人の」などいへる、姿・言葉、いみじくをかし

く侍り。尤以左可為勝。

72 拾玉集・廿題百首・五月雨二〇三二(ナシ)、玉葉・夏三五九 参考「待つ人の今も来たらばいかげせむ踏ままく惜しき庭の雪かな」(詞花・冬一五八 和泉式部) ○跡：人が雪上を踏み歩いた時に残る跡。○厭はれき：嫌われてしまった。○問へかし：声を掛けて下さい。▽上句の雪の頃に尋ねられなかった理由を承けて、五月雨の頃には跡を厭うこともないから尋ねて欲しいという。

73 長秋詠草(未見)。新古今・夏二四九、三百六十番歌合・夏二〇八 ○花たち花：花橋。昔の回想を起こさせるもの。「五月まつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今・夏一三九 読人不知) ○涙露けき：涙で濡れてしっとりとしている。○うたゝねの夢：仮寝で見る夢。「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき」(古今・恋五五三 小町)

六番 七夕

左勝

73 七夕の心や空に晴ぬらん雲の衣に秋の初風

同

74 中々に闇なるべしと思ひけり秋の七日の星合の空

右 両首の「七夕」、姿・言葉、共に艶に見え侍にとりて、左の末の句、殊にをかし勝ると申侍べし。

73 拾玉集・四季雜各廿首都合百首・秋三二一一三〇〇(初句「織女の」) ○七夕：織女と牽牛が年に一度の逢瀬を許されること有名。下に「雲の衣」とあるので、異文「織女の」の方が妥当か。○心や空に：心がうつろに。虚脱状態に。○雲の衣：雲を、織

女の着ている着物に見立てていう語。「天の河霧立ち昇る七夕の雲の衣のかへる袖かも」(万葉・卷一〇・二〇六七)

74 拾玉集・十題百首・天象一五〇六(ナシ) ○中々に：なまじつか。○闇なるべし：闇であるのが良い。○星合：陰曆七月七日、七夕の夜に牽牛星と織女星が会うこと。▽年に一度しか逢えないのなら、却ってその空が逢うことを隠す闇であって良いと思ふ。

七番 故郷鹿

左勝

75 古郷の庭のあるじとなりけり残りし野辺の小牡鹿の声

右

75 移しうゑし元の野辺にぞ帰り行荒れて嬉しきませの内哉

左右の秋哥、共に姿をかしう、心深くは侍を、猶左の「残りし野辺の小牡鹿の声」、ことにをかしく聞こゆ。又以左為勝。

75 拾玉集(未見) ○残りし野辺：他の誰も居なくなり、残ったのは鹿だけという寂しい状況。○小牡鹿の声：「雄鹿」をさす歌語。

「小(さ)」は接頭語。野にあつて秋の寂しさを募らせる景物。

二二三 皇后宮右衛門佐)

76 拾玉集・廿題百首・草花二〇三九(ナシ) ○荒れて嬉しき：荒れることを却って嬉しく感じる。○ませ：竹などで作った低い粗い垣根。▽元の野辺に戻ることを嬉しいとする。

八番 月哥中に

左

77 有明の月の行へを眺めてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

同

78 入ぬれど涙の露影とめて月は袂に有明の空

右勝

兩首の「有明の月」、又共にをかしくは侍を、右の「月は袂に有明の空」、猶有がたく侍にや。仍右勝べくや。

77拾玉集・花月百首・月一三九一1391、新古今・雜一五二一、玄玉

集・天地一八六 参考「世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて」(源氏物語・花宴一〇五) ○月の行へ：西

方浄土を含意する。○野寺：慈円の愛用した語。「野寺訪僧帰帶月 芳林携客醉眠花」(和漢朗詠・僧六〇五 鮑溶) ○鐘：晨朝の鐘。卯刻、午前六時に鳴らす鐘。

78拾玉集・花月百首・月一三九六1396、玄玉和歌集・天地一八八

○入ぬれど：月は山の端に入ってしまったけれど。○涙の露に：涙はまるで露のように袖を濡らして。○月は袂に：月が涙で濡れた袂に残っているかのように。「入ぬれど」とあるから、その影が映っているのではない。

九番 冬の心、山里にて

左

79 冬枯れの梢にあたる山風のまた吹くたびは雪の天霧る

題同

右勝

80 深山木の残りはてたる梢よりなほ時雨は風なりけり

左哥、心・詞、幽玄の風躰なり。たゞし、右哥の「残はてたる」といひ、「なほ時雨は」などいへる、姿・心、ことに宜しく聞こえ侍り。勝るべくや侍らん。

79拾玉集・四季雜各廿首都合百首・冬三二四八3035、無名和歌集・

冬五四 ○冬枯れ：冬、草木の葉が枯れること。また、そうした冬の寒く寂しい情景。○たび：時。折り。○天霧る：雲や霧などが掛かったように空が曇る。ここでは雪に拠る。

80拾玉集五一〇四4789、新勅撰・冬三八九 ○深山木：深い山に生えている木。○残りはてたる梢：時雨も木葉も降り尽くして最後まで残った常磐木の梢。○なほ時雨は：いまだにやはり時雨のような音がするのは。▽嵐が時雨のような音を立てる。○幽玄：歌論用語。余情のある静かな美しさ。相對評価として負

としているが、幽玄を重視しなかったと考えなくて良い。

十番 後朝恋

左

81 帰るさの月ぞ悲しきまどろまでやがて有明を眺めしよりも

暁恋

右勝

82 暁の泪や空にたぐふらん袖に落くる鐘の音かな

両方の恋の姿・言葉、勝劣なくは侍を、右の「袖に落くる鐘のおと哉」といへる心、なほ限りなく侍べし。又以右為勝。

81拾玉集・廿題百首・後朝恋二〇七五(ナシ) 参考「有明のつれ

なく見えし月よりも暁ばかりうき物はなし」(古今・恋六二五 忠岑) ○帰るさの月：帰る時に見る月。○まどろまで：恋人を待ちわび眠らずに。▽つれない恋人を待ちわび有明の月を見るよりも、後朝に見る月は悲しい。

82拾玉集・歌合百首・暁恋一七四一1641(第二句「涙やせめて」、

新古今・恋一三三〇、六百番歌合・恋七九〇(第二句「涙やせめて」) ○暁：共に一夜を過ごした相手と別れるという悲しい時。

○空に：当該歌合では「せめて」が非難されているので改めたか。「せめて」はひどく、身に沁みて。○たぐふ：呼応する。○袖：「涙」の縁語。○落くる：鐘の音が落ちてくるように聞こえ、それと共に涙が落ちる。○鐘の音：卯刻に撞く晨朝の鐘。▽朝の別れはつらく、鐘の音を聞いただけで涙が落ちると詠む。

十一番 述懐

左持

88 世の中を思つゞけて音を泣けば心の月の袖を写れる

同

右

89 いかにして今まで世には有明の月せぬ物を厭ふ心は

左の「心の月」、右の「有明」、ともに心深くして勝劣分ちがたく、同科とすべし。

83 拾玉集（未見） ○音を泣く…音に出して泣く。○心の月…「心

月」の訓読。悟りの心の明らかことを、月に喩えていう語。「いかで我心の月をあらはして闇に惑へる人を照らさむ」（詞花・雑四一

四 頭輔

84 拾玉集・北山樵客百首・述懐一九九六1835、新古今・雑一七八

三、三百六十番歌合・雑六九九 参考「有明のつきせぬ人の物思

ひは鳴の羽搔き数へわびなむ」（大斎院前の御集二三七）○有明の月…上には「世には」と「有明」を掛け、下は「月」を「尽き

せぬ」に掛ける。○月せぬ物を…どうして空に留まっているのだらう。第四句切れ。○厭ふ心は…厭離の心を持ち続けているの

に。

十二番 無常

左持

85 鳥辺山夜半のけぶりの立たびに人の思ひやいと沿ふらん
同行に思ける人うちつゞきはかなく成にければ、思ひ出て

右

88 故郷を恋ふる涙やひとり行友なき闇の道芝の露

左右の哥、心・姿、又同科侍べし。

85 拾玉集・御裳濯百首・無常五七六576、新勅撰・雑一二三三 参考

「鳥辺山谷にけぶりの燃え立たばはかなく見えし我と知らなん」（拾遺・哀傷一三二四 読人不知）○鳥辺山：山城国愛宕郡鳥

戸郷。今の清水寺から泉涌寺までの東山山麓の地域。古くは茶毘所および墓地として有名。○夜半のけぶり：茶毘の煙。○人の

思ひ：亡くなった人に対する思い。○いと沿ふらん：一層付け加わることであろう。

86 拾玉集（未見）。新古今・哀傷七九四（第四句）「ともなき山のこ

○同行：仏道修行の仲間。○友なき闇：死出の山。無明の闇。異文「ともなき山の」では単に孤独な境涯を示すことになる。○道

芝の露：路傍の雑草に宿る露。「道芝の露にあらそふ我が身かないづれかまづは消えむとすらむ」（新古今・雑一七八八 清慎公）

十三番 七宮隠れ給て、雲林院に後の業などして、帰りてのち

左

87 悲しさを雲の林に留めしより涙の雨ぞ晴るゝ間もなき

同周忌の日、御墓にまゐりて

右勝

88 そこはかと思つゞけて来てみれば今年の今日も袖は濡れけり

左「雲の林」「涙の雨」など、寄せある風躰、をかしく侍べし。右「今年の今日も」といへる姿、猶勝ると申べくや侍

らん

87 拾玉集 (未見) ○七宮：覺快法親王。鳥羽上皇の第七皇子。十

一歳の時、慈円は覺快法親王の室に入り、道快と称した。○雲林院：北区紫野にあった寺院。淳和天皇の離宮であったが、仁明天皇常康親王に伝授され雲林院と改めた。○後の業：死後の安業を願って行ふ仏事。○雲の林：雲林院のこと。「雲林」の訓詁による歌語。「この世をば雲の林に門出して煙とならん夕をぞ待つ」(千載・雜一一二四 良暹法師) ○涙の雨：涙がとめどもなく流れるさまを雨に喩えた。○晴るゝ間もなき：雨が止むことがない。「晴る」は「涙」の縁語。

88 拾玉集 (未見)。新古今・哀傷八四一 ○周忌：人の死後、年ごとに回ってくるその人の命日。○そこはかと：あれやこれやと。「墓(はか)」と掛ける。「そこはかとなく」とありたいところだが、同じような意か。「そこはかと知りて行かねど先に立つ涙ぞ道のしるべなりける」(更級日記・二二) ○今年の今日：周忌をさす。

○寄せ：歌学用語。縁語。▽判詞からも「右勝」だが、底本に表示は無い。他本にて補訂。

十四番 秋の比、故内大臣の嵯峨の墓所にて、念仏などおこなひけるに

左持

89 山里は袖の紅葉の色ぞこき昔を恋ふる秋の涙を

観性法橋隠れて後、西山往生院にて如法経など書かむとて、罷り入りたりけるに

右

90 尋くるわが袂には露おちて昔の跡に秋風ぞ吹

両首、左は「昔を恋ふる秋の涙」、右は「昔の跡の秋風」、共にあはれ浅からず侍り。勝劣なかるべし。

89 拾玉集 (未見)。新後撰・雜一五二七、秋篠月清集一五五八 ○故

内大臣：良経兄の内大臣良通。文治四年二月二〇日没(二二歳)。○袖の紅葉：袖が悲しみの涙(紅涙)で紅く染まっているさまを紅葉に喩えた。同時に濡れた袖にも紅葉が映っている。○昔を恋ふる：良通の生前のことを慕わしく思う。

90 拾玉集五六八 89 89 ○観性法橋：美作守頭能の子で、天台座主顕真の同胞。全玄と同じく行玄に受法し、慈円に授法している。建久元年一月入寂。○西山往生院：観性の旧跡。○如法経：一定の法式に従って経文を書写すること。特に法華経をさす。○露：涙の比喩。○昔の跡：故人の住居跡。○秋風ぞ吹：「飽き」を響かせ、故人の居ない秋の渺々とした情趣を醸し出す。

十五番 金剛界五部の中に、蓮華部を

左持

91 なかぞゝれ同じ聖の巡りあるきりくじの蓮胸を開けぬ

妙法蓮花を

右

92 驚の山八年の法をいかにしてこの花にしも喩へそめけん

左の「きりくじ」、右の「妙法蓮花」、勝負に及べからずや侍らん。同科とす。

93 いかゞみる西に心は掛くれどもなほたち帰る志賀の浦波

久雖願西土之蓮、転可留東湖之砌故云

91 拾玉集・廿題百首・釈教二一〇四(ナシ) ○金剛界五部：金剛

界曼荼羅の九会のうち、中央の羯磨会をさらに蓮華部・金剛部・仏部・宝部・羯磨部に分けたもの。金剛界は大日如来の智の面を表したもので、大日如来の理の面を表した胎藏界の対。○なかぞゝれ：他本にて「なかぞらの」に修訂。地にもつかず上空でもない中途の天。中天。「中空に立ちある雲の跡もなく身のはかなく

もなりにけるかな」(伊勢物語・二一段) ○きりくじ…梵語「キ
リク」の字。阿弥陀如来のこと。○蓮…極楽往生したものが座
る蓮華のこと。○開けぬ…花が咲いてしまった。

92 拾玉集・宇治山百首・蓮一〇三五1035 ○鷲の山…靈鷲山。釈迦
が法華経を講説した山という。○八年の法…法華経のこと。「凡
法華は八ヶ年の説相也」(書陵部蔵『法華要文百首和歌』) ○こ
の花にしも…この花によくも。「花」とは妙法蓮華経(法華経)の
比喩。○喩へそめけん…「いかにして」を承けて、どうして喩え
始めたのだろう。

93 長秋詠草(未見) ○いかゞみる…どのように見るだろうか。○
西…西方にある極楽浄土。○たち帰る…元の場所に戻ってしま
う。「たち帰る」は「波」の縁語。○志賀の浦波…「志賀の浦」
は琵琶湖の西南岸。

○西土之蓮…西方浄土の蓮台。○東湖…琵琶湖。

Annotation to Priest Jichin's poems in the form of Competition (I) (慈鎮和尚自歌合)

Hajime ISHIKAWA

ABSTRACT

We prove that Priest Jichin's poems (慈鎮和尚自歌合) were composed at the end of 1198 (建久九年). His postscript reveals the process of their composition. Also, it is known that Fujiwara Shunzei (藤原俊成), the judge of the poem's competition, developed his theory of making poems.

This study deals with the first half (大比叡・小比叡・聖真子), and gives annotations for difficult phrases and poetic expressions.